

琵琶湖定点定期観測

大山明彦・鈴木隆夫・井戸本純一・菅原和宏・金辻宏明・石川和彦

1. 目的

琵琶湖の漁場環境の動向を把握するため、大正4年(1915年)から水象と水質の定期観測を実施している。

2. 方法

令和6年(2024年)4月から同7年(2025年)3月までの毎月1回、彦根港と安曇川河口の舟木崎を結んだ直線上に設けた5定点(Stn. I~V、図1)で、水温、透明度、プランクトン沈殿量、溶存酸素(DO)濃度、栄養塩濃度等の測定を行った(詳細については、資料編を参照)。

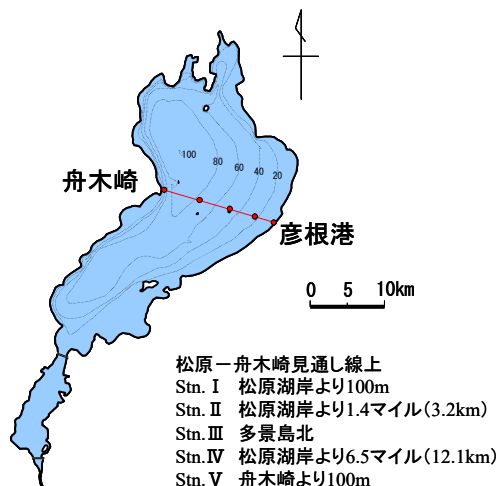


図1 調査地点

3. 結果

表層(0.5m水深)水温の5定点平均値は、5月、6月と3月に平年値(1991年から2020年までの月別平均値。)を下回った以外は、平年値を0.1℃~3.6℃上回って推移した。特に7月には平年値を3.6℃上回る29.1℃、9月には3.5℃上回る29.0℃となり、12か月中5か月で平年値を2℃以上上回った(図2)。

底層(Stn. IV:水深約80m地点における湖底直上1m)におけるDO濃度は、2.1mg/L~11.4mg/Lの範囲にあり、貧酸素状態の指標値である2mg/L未滿とならなかった。底層DO濃度は、7月に急激に低下し10月に2.1mg/Lとなったが、以降緩やかに上昇し、翌1月に3.6mg/Lとなり、2月に10.5mg/Lまで回復した。4月から6月までは近10年平均値(2013年度から2022年度までの月別平均値)並みかそれを上回る値で推移したが、それ以降翌1月までは12月以外下回った。

なお全層循環は、琵琶湖環境科学研究センターにより2月14日に確認された。

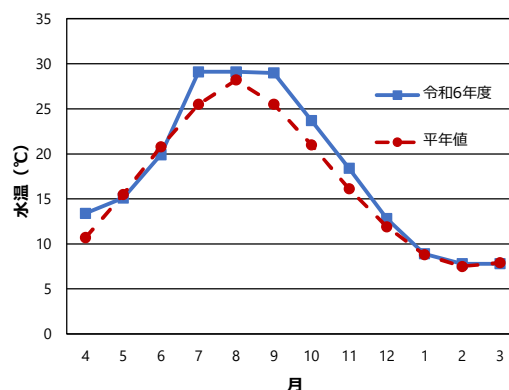


図2 表層水温(5定点平均値)の経月変化

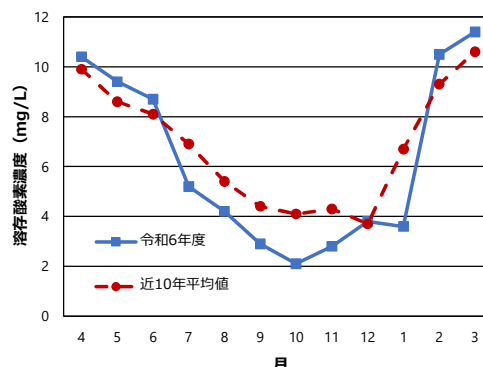


図3 Stn. IV底層(水深約80m地点の湖底直上1m)におけるDO濃度の経月変化